月刊　教育情報誌

明日への学び

第　２　号

２０１２年 １０月 １５日　発行
発　行：福井県教育委員会
福井県学力向上センター
ＴＥＬ：0776-20-0295
メール：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp

―“活力ある”組織の創り方―

子どもたちの学力向上、いじめや不登校対策、学校経営に求められる説明責任など、教育現場の課題は高度化しています。こうした中で、「学校は、疲弊している。忙しい。人を増やせ。」とさかんに言う人たちがいますが、忙しいのは学校だけでしょうか。

―おびただしい数のメールやインターネット情報等を処理し、法令順守や個人情報保護の強化の中でルールが増加して事務処理案件が急増。一方、リストラが進み、一人何役もこなす。―　このような企業の様子は、メディアでよく見る光景だと思います。忙しくなっているのは、社会全体だと言えるでしょう。

では、そうした社会、例えば民間企業では、どのように業務の増加に対応しているのでしょうか。一つは、意思決定の方法の変更でしょう。業務が増加しても意思決定のスピードを落とさぬよう、権限を下位に委譲したり、あるいは逆に、トップに多くの権限を集中させています。また、業務見直しを行い、ＩＣＴの活用で時間的コストが多く発生していたタスクを減らすなどの取組みもあります。そして、これらは、決して顧客に提供する価値を落とさずに実現しようとしています。

こうした取組みは、トップから指示として出たものばかりではありません。従業員一人ひとりのアイデアの場合もあります。仕事量の増加に対応するために様々な仕組みを変えようとする全社的活動がそこには見てとれます。

児童生徒と接する時間は減らすことができず、学校と民間は違うという人もいますが、「忙しい、忙しい」と嘆くだけでは事態は何も変わりません。児童生徒への教育の質を落とさず、何か改善できることはないか常に考え、ＰＤＣＡを繰り返す。優秀な福井の教員が知恵を集めれば、それは決して難しいことではありません。

“活力ある”組織の創り方。今月号は、このことを考えていきます。

＜目　次＞

○忙しいから時間を生み出す　Ｐ 2
○“知”の共有・活用を進める　Ｐ 6
○“知”の共有化で生徒指導も効果的・効率的に　Ｐ 8
○どんな状況でも「生徒の学び」は大切にする　Ｐ10
○お知らせ　Ｐ 11

全教員向け

忙しいから時間を生み出す－活力ある学校活動検討会から－

県教育委員会では、９月１３日に「活力ある学校活動検討会」を開催し、勤務時間後の居残り時間等について協議を行いました。３０校について実施した調査では、平日１日平均の居残り時間は、２時間２５分となっています。

居残り時間を縮減するためには、日々の業務改善が有効です。この検討会では、様々な事例が出されましたので、参考にして各学校で実施してください。

○「会議」は正規の時間内にはできないか

—「会議」は“会議”を行うのではなく“意思疎通を図る”というカテゴリーで考える—

＜これまでの考え方＞
・会議を勤務時間内にすると子どもたちは自習になる。時間内に会議をするのは不可能に近い。

今回の検討会では、「総合的な学習の時間」などで学年協力型の授業を行い、子どもたちが主体的に活動する状況をつくりながら、その間に同じ学年の教員が生徒の状況を共有している事例などが挙げられました。「会議」にこだわるのではなく、会議の本質は、「意思疎通・問題共有」だと発想の切り口を変えれば、このような考え方も可能になります。（Ｐ８の澤崎教諭の事例も参考にしてください。）

○「会議」を減らせないか　—「職員会議」や「朝礼」を抜本的に見直す—

今回アンケートを行った３０校には、それぞれが実施している一学校一改善運動について調査を行っています。その結果、明らかになった運動の内容は以下のとおりです。

＜一学校一改善運動での取組み＞

・事前の資料配布により時間を短縮する
・事前に段取りを十分に行う
・会議の前に目途の時間を示す
・定期会議をやめて随時開催に
・学年会は時間内でのみ行う
・夏休み等の会議を縮小し、授業研究等を行う
・まとめてできるものはまとめる
・朝礼を一日おきに実施する
・教頭主催の委員会で会議の項目を選別する
・進行役の運営を工夫する

組織では、様々な意思決定がつきものですが、組織の中で流れる情報全てに意思決定が必要かというと、そうではありません。トップに報告すれば済むものもありますし、同僚と共有すればよいものもあるでしょう。一学校一改善運動でも、意思決定のものと報告事項に分けて、会議内容を簡素化している事例がありました。検討会では、業務量が毎年増加傾向にあるとのことですが、前書きに述べたとおり、そうした事例は官民を問わず、どこの組織でも生じています。今後は、意思決定についても、職員全体で決定すべきものなのかどうかを考えることも重要です。

例えば、職員会議、学年会、教科会等のあり方を見直すことはできないでしょうか。これまで当たり前のように行ってきた職員会議を思い切ってなくしてみるというのも一つの方法です。意思決定は、担当者と管理職で行う。決まったことは、メール等で全員に周知する。「重要な意思決定は会議で」という考え方で会議を行っているのであれば、業務量に合わせて意思決定スタイルを改めて考えてみる必要もあると思います。

○若手にＩＣＴ活用策を検討してもらう

＜一学校一改善運動での取組み＞

・ＩＣＴを活用し、反省・改善点を資料データとして残して保存し、来年度の実施に役立てる。
・ファイルを共有化したり、校内メールや掲示板の利用など校内ネットワークで連絡を行う。

事務効率化の手法は様々ですが、まず考えられる方法として、ＩＣＴを活用することが挙げられます。ＩＣＴは、日進月歩で、キャッチアップしていくのは大変ですが、一方、大学生活などで、つい最近までインターネットを使いこなしていた若手教員がいます。ＩＣＴは、こうした若手の教員がベテランの教員と対等に渡り合える分野の一つでもあります。ＩＣＴを活用した事務改善の担当者に若手教員を指名し、スケジュール管理やファイル共有、掲示板活用など様々な業務効率化のシステムを考えてもらう方法もあります。これらの教員のモチベーション向上にもつながるのではないでしょうか。

○部活動に外部指導者を活用する

＜これまでの考え方＞

・部活動は１９時ごろまで行われる。部活動に苦痛を感じている者もいる。多忙感の原因の一つには部活動もある。

部活動については、中学校や高校の学習指導要領の中で、学校教育の一環として実施されるものに位置付けられており、校務と言えます。ただ、必ずしも教員が全てをする必要はなく、地域の人々や団体等の連携など運営上の工夫を行うこととの記載も学習指導要領にあり、外部の指導者などを活用することも可能となっています。検討会では、外部の指導者を活用した場合に解決すべき様々な課題も提示されましたが、部活動にも外部の力の活用も考える時期なのではないでしょうか。

現在、県内の学校では、３２の中学校と８つの高校が、補助金を得て、地域の指導者を活用した活動を実施しています。スポーツ保健課で対応しています。来年度以降であれば、予算の範囲内で活用することも可能ですので、ご相談ください。

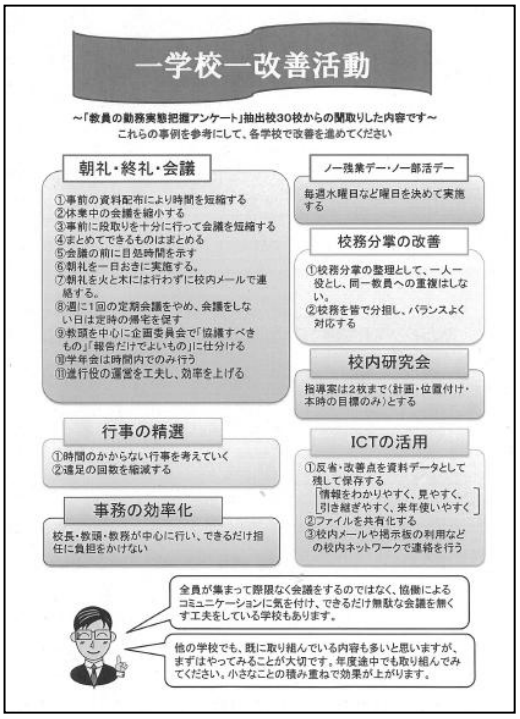
※スポーツ保健課保健・防災教育グループ
電話０７７６－２０－０５９８

○常に改善し続けることが重要

繰り返しになりますが、何もせずに放っておけば、仕事はどんどん増えます。解決するためには、仕事のやり方を見直すことです。

トヨタ自動車のように、毎日現状に満足することなく考えれば、必ず仕事の改善策があるはずです。改善は、ここで終わりと言ったとたんに必ず終わりになってしまいます。

他の事例等も調べてアンテナを立てながら、少しでも取り入れられるものはどんどん導入し、とにかく前に進めてください。



図表１：抽出校の一学校一改善運動

子どもたちの学びを深めるために①　　―福井市円山小学校、永平寺中学校―

各学校では、実際、どのような業務改善活動を行っているのか。「活力ある学校活動検討会」の調査結果も参考にしながら、福井市円山小学校と永平寺中学校の状況を具体的にみていきます。

○すっきり感で“忙しい”という感覚を改善　―円山小学校―

＜学校組織・校務分掌の見直し＞

同校では、職員一人ひとりがスムーズに校務を遂行できるように、細分化されていた校務分掌を大括り化して、教員の校務を「一人一役」としました。また、校内の研究組織についても「心づくり」、「授業づくり」、「地域環境」の３部会とし、校務分掌と併せて研究組織を編成しました。そして、大東中学校区教育の３つの研究組織とも連携させ、さらには、校内の生徒指導部会や特別活動部会も兼ねるようにしました。

校務分掌を大括り化し、いくつかの組織と関連、統合させたことは、各教員に“すっきり感”が生まれ、頭も整理され、忙しいという感覚の改善につながっているのではないでしょうか。

＜業務を行った担当が来年度の計画を策定＞

もう一つは、業務で得た反省を漏れなく活かして次の展開につなげていくための方策です。同校では、業務を終えた担当が、その反省を活かして来年度の計画を策定していく取組みを、今年度から新たに実践し始めました。①時間がたってから計画策定をしようとすると、反省点を思い出すのに時間がかかること、②新しい担当が策定しようとすると、一から考え直すことになり、全ての反省が活かされなくなるということです。業務一つひとつの反省点を確実に次の業務につなげていくことで、物理的にも心理的にも余裕が生まれ、さらなる工夫改善も可能になっていくのではないかということでした。

○時間にけじめをつけてだらだらしない　―永平寺中学校―

＜“礼の教育”を教員も実践し、規則正しい生活へ＞

永平寺中学校は、校門の礼や無言清掃など“礼の教育”を実践している中学校ですが、同校の教員も、授業開始前に教室に行き、授業のチャイム時には、生徒とともに黙想したり、校門の礼を行うなど、永平寺中学校の“礼の教育”を実践しています。“礼の教育”を全校挙げて実施することで、生徒も教員も時間にけじめができ、だらだらと物事を進めることが少なくなります。特別なことを行うのではなく、土台となる普段の生活を糺すという当たり前のことを実践し、効率化を図っている事例と言えます。

＜部活動のない日を一日つくる＞

また、同校では、部活動を月曜日は行わないこととしています。放課後のわずかな時間ですが、教員の教材研究や教科会など、時間外になりがちなこうした活動を行える時間を設けることで、教員が計画的に物事を進める時間が確保されているという安心感につながっています。

○各学校の独自性に合わせた創意工夫を

これらの事例は、そのまま他校で導入できるものではありません。重要なのは、児童・生徒、教員、地域や保護者など各学校の環境・特徴にあった方法を考えていくことです。そのためには、校長がリーダーシップを発揮し、教員一人ひとりの仕事の状況を把握して、抱えている悩みなど些細なことでも見ていく必要があるでしょう。また、忙しいという感覚は教員一人ひとりの感じ方ですから、業務改善だけで解消される訳ではありません、校長が教員に目配りし、誉めたり、やりがいを持たせるなど有能感につなげていくことが大事です。こうした活動が、この２校ではよく実践されてきているようです。

子どもたちの学びを深めるために②　　―県外の学校の活動―

業務改善活動は、他の自治体の学校でも行われています。ここでは、文献情報ですが、活力ある学校活動に向けて、示唆のある事例をご紹介していきます。

○授業づくりと授業研究が大事　－茅ヶ崎市立浜之郷小学校の活動―

同校は、平成１０年に開校した比較的新しい学校で、７００名弱の生徒がいます。年間１００以上の授業研究が行われ、全国の教員に公開されるものも５０以上あり、毎年１０００名以上の教員が全国から訪れるという授業づくりと授業研究に注力している学校です。しかも、教員は、１７時には仕事を終了しているということですが、ここまで授業に注力できるのはなぜでしょう。

まず、校務分掌について、一役一人制として分掌部会をなくしています。担当とトップの責任は大きくなりますが会議は減ります。同校で会議と言えるものは、毎月１回の職員会議だけとのことです。

また、朝の打ち合わせ会もありません。必要な連絡は職員室の掲示板に書き、情報共有が滞った場合は、その掲示板を見落とした方に責任があるというルールになっています。職員室も、学年ごとに４つの机が一組となって配置されており、机の上にはほとんど何も置かれておらず、同じ学年の教員ごとに、話がしやすい環境が整っています。

○“忙しい”を未然に防止する　―横浜市立潮田小学校の活動―

潮田小学校も約７００名の生徒がいる学校です。この小学校では、校長がリーダーシップを発揮し、初動の対応を強化し、トラブルなどの種を未然に防ぐということを念頭においた活動をしています。

例えば、保護者とのトラブルがあった場合には、教員一人が背負いこんでしまわないよう、校長も一緒に解決に当たります。また、トラブルの解決を電話で済ますようなことはせず、保護者に直接会って対応するということを徹底し、子どものよい変化も家庭に伝えるようにしました。このひと手間をかけた結果、５０回あった保護者との面談が、２年目には３回に減少したとのことです。

また、同校は、２３年度から、１年生を対象に５月学級編制を開始しました。４月は仮学級とし、児童の様子を確かめてから、ゴールデン・ウィーク明けに正式な学級編制を行います。仮学級は、児童の居住地域で区切ったり、児童の発達差に配慮して誕生日で分けるなど工夫をして編制します。４月の１か月の間は、１年生全体の行事も取り入れており、小１プロブレムのいくつかの要因を除くことにつなげているとのことです。

○両者の特徴は優先順位の明確化と教員同士の対話の重視

それぞれの学校の活動をみると、まず、学校として最も大切にすべきものは何かを決め、その方針の中で不必要と判断するものは削っていくという活動をしていると考えられます。あらゆるものを実施するという学校経営もありますが、学校の理念に合わせ、優先順位を付けて業務改善を進める方法もあることを示唆しています。

また、職員室の机の配置や保護者とのトラブル解消に校長が最初から入る事例にみえるように、県外の事例でも、教員同士や管理職と教員の対話に心を砕いています。教員同士が気軽に相談し合い、自分たちの授業や生徒指導の方法をさらけ出し、他の教員から意見をもらい合う。他の教員は、共感的に相手の話を聞いて、励まし合える環境を校長が創っていくということが大事だと言えるでしょう。

＜参考文献＞
・大津志津子、青柳宏『子どもの「学び」と授業研究』宇都宮大学教育実践総合センター紀要第３０号、2007 年
・亀田徹『余分なものをカットする学校経営』PHP 総研、2009 年
・佐藤学『学校見聞録―学びの共同体の実践』小学館、2011 年
・佐藤学『学校の挑戦―学びの共同体を創る―』小学館、2006 年
・高田公美『教育力向上支援事業派遣報告書』富山県ホームページ、2011 年
・渡辺研『こうすれば、教師に「ゆとり」は想像できる』教育ジャーナル４月号（学研教育みらい）、2011 年
・渡辺研『和やかに仕事のできる職員室を目指して』教育ジャーナル５月号（学研教育みらい）、2012 年

全教員向け

“知”の共有・活用を進める－教材研究支援システムの活用－

教育研究所では、教員一人ひとりが授業に活用してきた教材や教具等を共有することで、県内教員の授業準備や教材研究の負担軽減を図るため、「教材研究支援システム」を教育研究所のウェブサイト上に掲載しています。しかしながら、現在の参加率をみると、小・中の教員は約６０％、高校は約２０％に留まっています。全員の利用につながっていない背景としては、一つはコンテンツの魅力不足がありますが、もう一方で、教員が、互いに「知」を共有し学び合うことの重要性に対する認識が不十分という側面もあるのではないでしょうか。今一度、教材研究支援システムの活用を意識してください。

○教材研究支援システムに登録されている情報を知る

教材研究支援システムには、どのような情報が登録されていてどのように活用できるのか。まず、そのコンテンツ内容を理解してください。(http://www3.fukui-c.ed.jp/~ncfec/htdocs/?page_id=43)

（パスワード等が分からない場合は、学校教育政策課 gakukyousei@pref.fukui.lg.jp までご連絡ください。）

図表２：教育研究支援システムのコンテンツ内容

コンテンツ	具体的内容
教材・教具	
ドリル教材	漢字、計算など各教科の基礎・基本的内容を繰り返し学習するプリント
ワークシート	読解力を育てる授業展開に向けた児童の書き込み用シート
歴史年号カルタ	年代を覚えやすく工夫したカルタ
教員用実験シート	理科の実験に必要な器具の使い方、授業の進め方を分かりやすく記載
図版素材	教員が自作プリントを作成する際に役立つ図版等
高校教材	入試対策用問題集、大学入試センター試験過去問良問集
白川文字学	副読本指導事例集、漢字学習副読本
ふくいについて学ぶ	福井の伝統の技、偉人、祭り、伝統行事、歴史等のデジタルコンテンツ
学習指導案	
県内の小・中・高・特別支援学校から集まった教育実践指導案	
授業名人作成案	
指導資料	
ＧＯＯＤ授業ナビ、ＩＣＴ活用資料、小・中学校の指導要録記入の手引き	
ＮＩＥ・学力調査・学力向上	
ＮＩＥ実践校の事例、福井県学力調査の報告、リトライプリントなど	
ふくい理数グランプリの過去問題	
教育研修資料	

○教材研究支援システムを教員同士が指導案を見せ合い研究できる場に

教材研究支援システムは、コンテンツをそのまま活用することもできますが、それでは教員一人ひとりの学びにはつながりません。

県内の優れた教員が作成したコンテンツを研究し、さらに自分のやり方、クラスの状況を勘案し、創意・工夫して優れた教材を作っていくことが重要です。そして、作成したものを教育研究所へ提供し、それを見た教員の皆さんが助言をしていくという“知”の循環が教員のレベルアップにつながります。

図表３：教材研究支援システムウェブサイトの内容

○中・高「授業改善指導事例集」なども掲載し、掲載コンテンツを強化

こうした“知”の循環をできるだけ様々な分野で生み出していきたいと考えています。そのため、まず、掲載コンテンツを広げます。現在、中学校と高校の教員が共同で、中・高の円滑な接続を目指し、「授業改善指導事例集」の作成を進めています。取りまとめ後、この教材研究支援システムにアップします。教員の皆さんからさらに意見を得て、さらなるレベルアップに努めていきたいと考えています。

○各学校で登録の推進を

教員一人ひとりが、このシステムを活用して教材を研究し、創作・工夫して作成した資料を、このシステムに登録するよう進めてほしいと考えていますが、一方で、恥ずかしさや目立つことを不安に思い、作成した学習指導案を自主的に掲載するという動機には、なかなか至らないのではないかとも考えます。

そこで、各学校で、組織的に登録活動を進めていくことも必要ではないでしょうか。例えば、教材研究支援システムへの登録を教員に呼びかける役目を設け、教員一人ひとりが、一年に最低１回は登録するよう働きかけを進めていただきたいと考えています。

○閉じこもらずに他人の“知”も活用してみる

教員は、児童生徒が、授業に参画し、学び合える授業の創造を日々目指しています。そのために、教員としての誇りをかけてそのための準備もしているのではないかと思います。そうした姿勢は非常に大事ですが、ともすると改善の余地があるにも関わらず、他の教員との学びを通じ、自己の活動を省察できなくなるという欠点も生じます。忙しい現代では、プライドをかけて全てを自前でやるよりも、様々な人々の“知”を活かしていく方が合理的かも知れません。

また、このようなシステムを使うことで、一から授業づくりをするよりも、効率的に準備ができる面もあります。教員としてのプロ意識をかけた授業づくりを進めるに当たり、他の教員の授業も冷静に分析して活用するスタイルこそが、さらに質の高い授業につながるのではないでしょうか。

全教員向け

“知”の共有化で生徒指導も効果的・効率的に

―武生第一中学校での実践―

滋賀県大津市の事件や福井市の中学校での暴力行為など、問題行動を未然に防ぐ活動が学校で進められています。各々の学校が、万全を期して取り組まれていると思いますが、これらの活動についても、より効果を生み、効率的に進められる方法があるのではないでしょうか。

福井大学教職大学院で研究する武生第一中学校、澤崎教諭に“生徒指導の可視化”の研究・実践について話していただきました。

○生徒指導の可視化を目指す“きっかけ”は、異動初日に生徒が行方不明になったこと

２０代の頃は、まわりのことが見えず、毎日が精いっぱいでした。特に生徒指導は、ほとんど上手くいかず、一方で、上手くいかないことを他の教員に知られるのは恥ずかしい、という気持ちで、悶々としていました。しかし、３０代になって最初に異動したＡ中学校で転機がありました。この学校は、その年に開校を迎えたのですが、いきなり初日に３年生の生徒が家からいなくなるという事件がありました。そこで、顔を知らないその生徒の写真を手に、ほぼ全ての教員が一緒に生徒を探し歩いたのです。

○今の職員同士の情報交流のままでは、問題行動が発見しづらい

この事件がきっかけとなり、生徒指導は教員全体で進めるという雰囲気ができました。開校した直後の学校で、教員全員が１年目ということも要因の一つにあったのかも知れません。校長も、“「前の学校では○○だった」と言わず、新しい方法を考えて。”と指導してくださいました。こうした活動がうまくいったこともあり、生徒指導も授業のように、多くの教員と意見交換し、全員が問題行動に関する情報を共有しながら進めていく方が効果的ではないかという仮説にたどりついたのです。

当時のＡ中学校は、生徒の問題行動について隣の教員に悩みを打ち明けると、後ろから別の教員が、「どうした？」と自然と関わりを持ってくださる雰囲気がありました。しかし、現状は、教員が忙しくなるにつれて、どの学校も、教員は自分が担当する生徒には気を配るが、他の生徒については気にかける余裕がない、という雰囲気になってしまいます。このままでは、問題行動の兆候を学校全体が見落してしまうのではないかという危機感にかられています。

○自分なりにやってみたこと　―学校の組織力を高めるための３つの改善―

３つあります。まず、第一に、校務分掌上の見直しでした。学年主任全員に、生徒指導部に入っていただくよう働きかけました。学年主任は、別の部の部長を兼ねる方が多いのですが、そうすると、生徒に問題行動の予兆があった場合、生徒指導部の学年担当がいったん学年主任に話を通すというプロセスが必要になり、迅速な対応が困難となります。この学校では、学校の生徒指導に力を入れるべきという雰囲気があり、こうした見直しが可能になりました。

第二は、スクールカウンセラーと全職員の相談の場の設置です。スクールカウンセラーにお願いし、月１回、教員が生徒指導について相談できる日を設定していただきました。カウンセラーは、生徒とも

話をしているので、教員が対応に悩んでいる生徒の気持ちをカウンセラーが聞いていて、「本当は、その生徒は〇〇という気持ちですよ。」と教員に伝えることができ、その結果、教員の悩みも消え、指導の方向性が明確になったことが実に多くあります。また、教員誰でもが一緒にその場に居られるので、問題行動等の情報が共有され、ケース会議を頻繁に開く必要がなくなったというメリットもありました。

第三は、校内 LAN の活用です。問題行動等の目立つ生徒については教員の共通理解もある程度図られるのですが、日頃からあまり目立たない生徒についてはどうしても情報が少なくなってしまいます。

そこで、担任や部活動顧問、学年の教員が気がかりな生徒について、“日頃の気づき”を校内ＬＡＮを使って書き込むようにしました。ただ、自主的にお願いするだけでは書き込みは進まないので、定期的に月２回ペーパー化し、運営委員会や職員会議で示しました。また、書き込まれた生徒に偶然会った時は、私も直接会って話し、その話から出てきた情報を担任や学年主任にフィードバックするように努め、校内 LAN が有効に機能していることをＰＲしました。

〇他の教員に働きかける　―改善の組織全体への波及の仕方―

生徒指導の問題は、デリケートで、他の教員を巻き込んでいくのには時間がかかります。例えば、どこの学校でもそうだと思いますが、教員の気持ちとして、自分が担当している学年の問題を他の学年に知られたくないという意識があります。それは、教員がプライドを持って仕事をしている表れでもあるのですが、あまり強すぎると、学校として継続した一貫指導ができないという問題もあります。そこで、私は、まず、様々な下準備は自分でやることにし、ほかの教員に提案するというやり方をとりました。

例えば、いじめに関する道徳や学級活動の授業があります。年間計画を眺めて、学級の諸問題や道徳の価値項目に合致する時期を見計らって、各学年の教員に授業の提案をさせていただきました。具体的には、指導案づくりや授業までの学年間の調整をやらせてくださいとお願いし、指導案を作ります。その後、他の教員に、指導案について意見をいただいたうえで、道徳や学級活動の授業研究でいじめを取り上げてもらえないかとお願いします。そして、その授業を他の教員に見てもらい、意見を言ってもらい、そしてやってもらうのです。このような交流を図ることで、複数の目で学級を見ることができ、生徒指導に関わる教員の情報共有が進みましたし、何よりも、会議を行わなくても授業の中で意識の共有が図れるという取組みにもつながっています。

教員だけでなく、生徒も巻き込みました。いくら教員がレベルアップしたとしても、やはり生徒しか知らない世界があります。生徒指導を行う上では、生徒の主体的参加が必要です。ちょうどこの頃、いじめのアンケートを実施し、「いじめられた生徒が悪い」という、気になる回答が非常に高かったことがありました。これは普通に道徳の授業をやっても生徒に響かないのではと考え、各クラスの級長と副級長を呼び、アンケート結果を見せました。生徒も、「いじめられた生徒にも問題がある」割合が今までと比べて高いのはおかしいと感じ、自分の学級を良くしようという意識を持ってくれました。そこで、担任にお願いして生徒主催で各学級会を開催するようにしました。その結果、授業の後も幾つかのクラスで「いじめに関するみんなの意識が十分でないので、次の授業もこのテーマでさせてください」と担任に頼んでくるクラスも現れるなど、自主的な動きにつながった事例もありました。

〇今後の課題　―未然防止に力点を置いて―

ここまで学校システムとして問題行動を捉えてきましたが、逆説的ですが、問題行動の発見は、やはり教員一人ひとりの力量です。担任しか気付かない時もあるし、逆に周りの教員しか気がつかない時もあります。それぞれの教員がアンテナを高くして、授業中、ある生徒が発表した際、周りが強い拒否感を示したとか、しらけムードが漂ったとか、そういうシグナルを敏感に感じなければ何も始まりません。生徒指導について可視化とともに個の力量アップをどう進めるかが今後の課題です。

中・高教員向け

どんな状況でも「生徒の学び」を大切にする

９月１８日、大東中学校において理科の授業研究会が開催され、高校と中学校から約２０名の理科教員が集まりました。

○授業内容；知識を基にプラスチックを特定する方法について理解を深める

公開授業の様子

授業は､｢第１章-５　プラスチックを区別する｣という単元で行われ、プラスチックの性質の違いを利用し､実験を通じて特定することがテーマでした。子どもたちは、前回までに、触感、密度、燃焼性の違いからプラスチックの種類と性質を理解しており、今回の授業では、①水、エタノール水溶液､食塩水に浮かせる､②オーブントースターで加熱する、③バイルシュタインテストをする、④リモネンなどによる薬品検査、などの実験を組み合わせ、５種類の個体が、それぞれＰＰ、ＰＳ、ＰＥ、ＰＶＣ､ＰＥＴのどれに該当するか明らかにするという課題が与えられました。グループは、仮説を立て、①②③④を使ってどのような実験をどのような順番で行うか決め、それぞれの方法に基づき、実験を進めていきました。

○高校の教員の気づき

授業研究会の様子

授業後、授業研究会が行われましたが、中学校の授業を初めて経験した高校の教員は、①中学校の授業研究会は、ブリーフィングから授業、授業研究会のグループ協議、大学院の先生による講評までがシステム化され学び合う環境が整っている、②高校レベルの探究型の授業が行われている等について理解し、こうした中学校の研究会に高校の教員も参加し、高校の授業についても意見をもらえる機会が必要ではないか、という意見がありました。

一方、バイルシュタインテストは、高度な知識と操作を必要とするため、中学校で行われることは少ないですが、発展的な実験は、科学への意欲を高めるので、もし行うならば、生徒が混乱しないような工夫が必要だという指摘がありました。また、全体的に実験が成功するよう誘導されていた感がありましたが、高校のＳＳＨなどでは実験失敗の経験も重要になるので、もっと自由度を高めてもよいのではないかという意見などもありました。

○１回の授業でもいろいろ分かる

たった１回の授業でしたが、高校の教員には様々な気づきがありました。こうした気づきを中学校の教員と共有していくことで、中学校の段階から生徒の学びを円滑に進めていくことができます。

どの教員も、日ごろから「生徒の学び」を深めようと、時間を惜しんで仕事をしています。時間があればあるだけ生徒のために使いたいという気持ちではないでしょうか。意思決定や他のオペレーションの見直しなどの業務改善を進めることは、こうした生徒の学びのための時間を生み出すことになります。

業務改善の最初の一歩は煩わしいかも知れませんが、授業力向上に力を注ぐためにも、全教員で業務改善を運動として実施していきましょう。

研修講座案内（教育研究所）

１１月の研修講座には、小・中学校での研究授業を含む講座が多くあります。また、文部科学省や大学から講師をお招きしての講義・演習や、各地区の授業名人やコアティーチャーによる実践発表などもあります。
日程や対象等の詳細は、各研修講座の実施要項をご確認ください。

B002　小学校国語科（Ⅱ）～子どもが生きる「読むこと」の授業づくり～　〔11/7　9:30～16:30〕
文部科学省教科調査官の冨山哲也氏をお招きして、言語活動を重視した「読むこと」の授業づくりについて、具体的・実践的方法を身に付ける研修講座です。鯖江市惜陰小学校の公開授業も参観します。

B012　中学国語科（Ⅱ）～思考力・判断力・表現力を育成する授業づくり～　〔11/2　9:30～16:30〕
国語科指導の現状と課題についての講義や、新学習指導要領を踏まえた確かな国語力を育てる授業づくりについての授業名人による実践発表があります。福井市清水中学校での研究授業も参観します。

B102　小学校社会科（Ⅱ）、B112　中学校社会科（Ⅱ）～社会科の「言語力」とは～　〔11/9　9:30～16:00〕
兵庫教育大学大学院の米田豊教授による、新学習指導要領が求める言語活動・言語力についての講義と演習を行います。小浜市の授業名人による実践発表もあります。小・中学校社会科の合同講座です。

B202　小学校算数科（Ⅱ）～今求められている算数科指導とは～　〔10/31 9:30～16:00〕
今、教師に求められている算数科指導について、実践発表や授業研究を通して、考察する講座です。
福井市と鯖江市のコアティーチャーによる実践発表や、永平寺町吉野小学校での研究授業参観もあります。

B212　中学校数学科（Ⅱ）～数学的な表現力を高めるための授業の実践～　〔11/2　9:30～16:00〕
数学的な表現力を高めるための授業の実践を通して、活用力を育てる指導法を習得し指導力を高める講座です。
越前市と坂井市のコアティーチャーによる実践発表や、福井市藤島中学校での研究授業参観もあります。

B304　小学校理科３年生～わかる！「電気の通り道」の授業づくり～　〔11/6 13:30～16:30〕
「電気の通り道」について、観察･実験、教材開発等を通した授業づくりを習得し指導力向上を図る講座です。
授業づくりのポイントについての講義や、効果的な観察・実験と教材の工夫に関する実習を行います。

※既に受講申込みが終了している講座もあります。詳細は福井県教育研究所へお問い合わせください。

新刊図書

■佐藤学『学校を改革する』岩波ブックレット、2012 年 7 月
一人残らず子どもの学ぶ権利を保障し、一人残らず教師が専門家として成長する学校は、どのようにして実現するのか。日本はもとより海外でも近年、爆発的に普及している「学びの共同体」の学校改革とは。その哲学、授業の進め方、教師間の連携、保護者との関係づくりまでを開陳する、学校改革の第一人者による待望の入門書。（Amazon ウェブサイトより）

■「教職課程 11 月号」（協同出版）　―福井の教員が全国に授業づくりを提言―
教員志望者向け雑誌「教職課程」では、福井県の教員が「模擬授業対策　わかる、できる、チカラがつく　授業のつくり方､進め方」というテーマで先月号から１年間にわたり､連載を行っています。11 月号は、小学校算数、中学校数学、高校地理について、教員が分かりやすく、かつ、洞察深く提言していますので、是非ご覧ください。

芦泉荘からのお知らせ

大きな会議室で“ゆったり会議”を　―宿泊研修会プラン―

１５名様以上（全組合員である必要はありません）のご宿泊を伴う研修会、勉強会、クラブ活動ミニ健康教室等で、会議室をご使用になる場合、会議室料および冷暖房費をサービスいたします。是非この機会にご活用ください。

ご意見をお寄せください。

連絡先：福井県学校教育政策課

住所　：福井市大手 3-17-1
TEL　：0776-20-0295
FAX　：0776-20-0668
Mail：gakukyousei@pref.fukui.lg.jp